

第一篇 商品と貨幣 第一章 商品  
 一 その構成—記述と論理—箇条的に—  
 その方法 現象—抽象—本質

第一節 商品の二要素 使用価値と価値  
 (価値実体、価値の大きさ)

## 論理的展開

使用価値=物の有用性、使用・消費されて実現  
 交換価値=A 使用価値 X 量と B 使用価値 Y 量  
 の交換比率  
 共通する交換価値=抽象的人間労働の対象化、  
 物質化=価値  
 価値の大きさ=社会的に必要な労働の定量  
 社会的に必要な労働時間  
 一定品目の価値の大小  
 =労働の量に正比例、生産力に逆比例

## 第二節 商品に表された労働の二重性

使用価値を形成=具体的な有用労働  
 価値を形成=抽象的人間労働

\* 第三節はマルクス独特の商品から貨幣への発展の論理展開、価値形態(相対的価値形態と等価形態)の第一形態から第四形態への発展として貨幣の成立をくどいほどに論ずる。

## 第三節 価値形態または交換価値

## A 単純な、偶然的な価値形態

一 価値表現の両極、すなわち、相対的価値形態と等価形態、

A 商品(相対的価値形態) = B 商品(等価形態)

## 二 相対的価値形態

## a 相対的価値形態の内実

商品の価値は、B 商品の使用価値に表現されて相対的価値の形態を得る

## b 相対的価値形態の量的規定性

- 1 亜麻布価値変化、上着価値不変
- 2 亜麻布価値不変、上着価値変化
- 3 亜麻布と上着生産労働量、同一方向、同一割合で変化
- 4 3の違った程度に変化する場合

## 三 等価形態

等価形態の三つの特性

- 1 使用価値が反対物の価値の現象形態
- 2 具体的労働が抽象的人間労働の現象形態
- 3 私的労働が直接に社会的形態の労働に

## 四 単純な価値形態の総体

単純な価値形態は一連の変態をへてやっと価値形態に成熟してくる萌芽形態である。個々の価値形態は、より完全な形態に移行する。その商品の個別的な価値表現は、それぞれにちがった単純な価値表現のいくらかでも延長されうる列に転化される。

## B 総体的または拡大せる価値形態

## 一 拡大された相対的価値形態

亜麻布 20 エル=上着 1 着という相対的価値形態の第一の形態は偶然的であるが、第二の形態、拡大せる相対的価値形態では、商品の価値の大きさが交換比率を規制する。

## 二 特別な等価形態

## 三 総体的または拡大せる価値形態の欠陥

商品の相対的価値表現は未完成で表示序列はいつになっても終わらない。相対する等価形態は無数の他の特別な等価形態とならんで一つの特別な等価形態である。

## C 一般的価値形態

## 一 価値形態の変化した形態

相対的価値形態の第一、第二の形態から第三の形態=一般的な相対的価値形態へ。一般的等価物としての排除された等価商品に、他のすべての商品と交換可能な性質をおしつける。

## 二 相対的価値形態と等価形態の発展関係

拡大せる相対的価値形態または第二形態は等価商品の特殊な相対的価値形態として現れる。

## 三 一般的価値形態から貨幣形態への移行

一商品が他のすべての商品から等価として除外され、終局的にある特殊な商品種に限定される瞬間から、初めて商品世界の統一的相対的価値形態が客観的固定制と一般的に社会的な通用性を得る。

## D 貨幣形態

第三形態から第四形態への移行。亜麻布のかわりに金が一般的等価形態をもつに至る。

直接的な一般的な交換可能性の形態、または一般的な等価形態がいまや社会的習慣によって終局的に商品金の特殊な自然形態と合生してしまった。

\* 第四節の物神性の理解は文章の表現だけでは難しいが、価値形態の発展が、商品—貨幣—資本の物進化をつくるマルクスならではの展開である。

## 第四節 商品の物神的性格とその秘密

・机が商品として現れるとなると感覚的にして超感覚的な物に転化する。商品の神秘的性質はその使用価値から出てくるものではない。それは、同じように価値規定の内容から出てくるものでもない。

・労働生産物が商品形態をとるや否や生ずる謎にみちた性質はどこから発生するのか?・・・商品形態の神秘に充ちたものは、単純に次のことの中にある。

・商品形態は、人間に対して彼ら自身の労働の社会的性格を労働生産物自身の対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映する。また、総労働に対する生産者の社会的関係をも、彼らの外に存する対象の社会的関係とし

て、反映する。

・このとりちがえによって、労働生産物は商品となり、感覚的にして超感覚的な、または社会的なものとなる。

人間に対して物の関係の幻影的形態をとるのは、人間自身の特定の社会的関係であるにすぎない。

類似性--宗教的世界の夢現京幻境-ここでは人間の頭脳の諸生産物が、それぞれ自身の生命を与えられ、相互の間でまた人間との間で相関する独立の姿に見えるのである。

商品世界においても人間の手の生産物がそのとおりに見えるのである。私はこれを物神礼拝と名づける。

商品世界のこの物神的性格は、商品を生産する労働の独特な社会的性格から生ずる。

- ・私的労働の生産物→私的労働の複合→社会的総労働 労働生産物の交換→私的労働の特殊的に社会的なる性格-交換の内部においてはじめて現れる。
- ・感覚的に違った使用対称性から分離された→社会的等一なる価値対象性=労働生産物の有用物と価値物への分裂

私的労働の二重の社会的性格

- ・一方において特定の有用労働として、一定の社会的欲望を充足させ、総労働すなわち社会的分業の自然発生的体制の構成分子あることを証明しなければならぬ。  
他方において生産者たち自身の多様な欲望を全ての有用な私的労働が全ての他の有用な私的労働種と交換されうる限りにおいて、したがってこれと等一なるものとなる限りにおいてのみ、充足する。
- ・違った労働が等しくなる=それが現実に不平等であることから抽象される場合=それらの労働が人間労働の支出、抽象的に人間的な労働として持っている共通な性格に約元されることによるのみありうる。
- ・価値のひたいの上にはそれが何であるかという事は書かれていない。価値はむしろあらゆる労働生産物を社会的の象形文字に転嫁する。

物神性(化)の根拠 -使用価値と価値の分裂  
価値の自己運動

・この価値の大きさは、常に交換者の意志、予見、行為から独立して変化する。彼ら自身の社会的運動は、物の運動の形態をとり、交換者はこの運動を規制するのではなくして、その運動に規制される。

・私的労働の社会的性格を、私的労働者の社会的諸関係を明白にするかわりに、實際上蔽いかぶせてしまうのも、まさに商品世界の完成した形態-貨幣形態-である。

## 第二章 交換過程

\* マルクスが、第一章で展開した商品の価値規定と価値形態の論理的発展を、あえて第二章 交換過程のなかで再述するのは、商品-貨幣の歴史的展開と、物神化する現出を強調するためである。

- ・商品 その所有者に対しては非使用価値  
非所有者に対しては使用価値。
- ・交換 商品を価値として相互に関係、価値として実現。
- ・商品 使用価値として実現される前に、価値として実現。他方、価値として実現される前に、使用価値であることを立証。これらは交換されてはじめて証明しうる。
- ・貨幣(再規定)  
全ての他の商品の社会的行動は、諸商品が一般的にその価値を表示する一定の商品を除外。除外された商品の自然形態は社会的に用いられる等価形態、一般的な等価として貨幣となる。貨幣結晶は交換過程の必然的な産物である。
- ・貨幣形態 (商品交換の拮かりに比例して)  
本来一般的等価の社会的機能に適する商品、すなわち貴金属に移行する。「金と銀は本来貨幣ではないが、貨幣は本来金と銀である。」
- ・貨幣の機能  
①商品価値の現象形態として役立ち、②商品の価値の大きさを社会的に表現(抽象的等一な人間労働の体化物)、③同一の異なるところのない質をもつ物質
- ・貨幣商品(となりうる条件)  
純粋に量的差異を表し、随意に分割しえ、その分割部分を再び合体させうるもの、金と銀はこのような属性を本来持つ。
- ・貨幣商品の使用価値の二重性  
①商品としての特別な使用価値 ②特殊な社会的機能から生ずる一つの形式的使用価値。
- ・全ての他の商品は貨幣の特別な等価にすぎず、貨幣はそれらの一般的等価である。それらの商品は、一般的商品としての貨幣に対して、特別な商品として対する
- ・交換過程は貨幣に転化する商品に、その価値を与えるのではなく、その特殊な価値形態を与える。  
両規定を混同すると、金と銀の価値を創造的なものとするような誤りにおちいる。  
貨幣は・・それ自身の単なる標章によって置換えらうるのであるから、貨幣は単なる標章であるという誤りも生じた。
- ・貨幣物神の謎は、商品物神の目に見えるようになった、眩惑的な謎であるにすぎない。

